

平安朝漢文学における赤松子像

——神仙への憧憬——

吉原 浩人

一 はじめに

『列仙伝』に登場する神仙の中でも、赤松子（赤精子・赤誦子）と王子晋（王子喬・王喬）は、「王喬赤松」「喬松」「松喬」などと、しばしば並び称される。『列仙伝』によれば、赤松子は神農のころの雨師で崑崙山に赴き西王母の石室に宿ったといひ、王子晋は周の靈王の太子晋で笙を持ち白鶴に乗って昇仙したといふ。はやく戦国期から、両者は神仙の代表として対にして語られていた。後世において、両者の伝承はさまざまに展開し、その用例は枚挙に暇ないほどであるが、赤松子・王子晋ともに同名異人がおり、描かれるイメージに混乱もみられる。

日本においては、空海や菅原道真はじめ多くの僧俗の詩文に両者の名が引用された。かつて私は、本朝における王子晋像の一端について検証したことがあるが、赤松子像については不十分なままであった。そこで小稿では、王子晋に続き赤松子の形象について検討

することによって、神仙世界に憧れる平安朝文人の心象を探るためのよすがとしたい。

二 『列仙伝』における赤松子像

赤松子を論ずる際の基本となるのは、『列仙伝』冒頭話なので、まずその本文を掲げる。（以下、原文を引用した場合、本文に続いて【】内に現代語訳を附すが、紙幅の関係で省略するものもある。また中国の文献にはA、日本の文献・史料には1の記号を附す。）

A 『列仙伝』卷上1

赤松子者、神農時雨師也。服_レ水玉_二、以教_レ神農。能入_レ火自燒。往往至_三崑崙山上_二、常止_三西王母石室中_一、隨_二風雨_一上下。炎帝少女追_レ之、亦得_レ仙俱去。至_三高辛時_一、復為_二雨師_一。今之雨師本_レ是焉。

【赤松子は、神農の時の雨師である。水精を服して、その用法を神農に教えた。火に入って自ら身を焼くことができた。しばし

ば崑崙山上に至り、いつも西王母の石室中に留まって、風雨に
随い山を上下した。神農の娘が赤松子を追って、同じように仙
人となって共に去っていった。帝嚳の時代になってからまた出
現し、再び雨師をつとめた。今の雨乞いの神はこれに基づいて
いるのである。】

ここから、以下の要素が抽出できる。①はるか歴史を溯る神農（炎
帝）時代の仙人で、②風雨を自在に操り、③水精（晶）を仙薬とし
て服用し、④火に自ら入っても焼けることなく、⑤しばしば崑崙山
に登り、⑥西王母とも懇意で、⑦神農の娘に慕われ、⑧帝嚳（高辛）
の時代にも出現した。これらのうち、後世に継承・発展していった
イメージと、あまり影響を与えなかったものがあるので、以下その
点にも留意していききたい。『列仙伝』は、一般に前漢の劉向撰とされ
るが、六朝期に増補あるいは擬作されたともいわれる。ほぼ同文の
伝は『搜神記』巻一、『法苑珠林』巻六十三、『芸文類聚』巻七十八、
『初学記』巻二十三などに引かれる。なお、『芸文類聚』巻八十八、
『初学記』巻二十八に、「列仙伝曰、好食_二柏実_一、齒落更生。」と、好ん
で柏の実を食べ、齒が落ちてもまた生え替わる、との記事を引くが、
これは現行の『列仙伝』には見えない。

三 中国における赤松子像

赤松子の名を記す文献は数多いが、以下に平安朝の文人が参看し

ていたと思われる著名な作品、あるいは思想史的・文学史的に重要
なものを中心に、代表的な用例をいくつか掲げ、簡単に解説する。⁽⁵⁾
いずれも、赤松子の登場する前後のみの引用である。

B 『楚辞』巻五 遠遊

聞_二赤松之清塵_一兮 願_レ承_二風乎遠則_一

【赤松子の清らかな行跡を聞き、その感化によって遺された法
則を承けたいと願う。】

いにしへの神仙の登仙を賛美し、隱遁の志を述べる中で、赤松子の
名を引く。『楚辞』の遠遊は、屈原の作ではなく漢代の擬作であると
いう。『楚辞』には、他に巻八「惜誓」〔前漢・賈誼〕、同「哀時命」〔前
漢・嚴忌〕などにも、赤松子の名が見える。

C 『戦国策』巻三 秦策

必有_二伯夷之廉_一、長為_二応侯_一、世世称_レ孤、而有_二喬松之寿_一。孰_二
与_レ禍終_一哉。

【必ず伯夷・叔斉の廉直さを保つたまま、長く応侯と呼ばれ、
代々王侯の自称である孤と称し、王喬・赤松子のような長寿を
保てるでしょう。災いをもつて一生を終えるよりいずれがよ
しいと思われませんか。】

燕の説客蔡沢は、秦に入り相国の応侯（范雎）を隱退させ、自らが
宰相になろうと長広舌をふるった。その最後に、功業を成し遂げる
も地位に恋着したため悲惨な最期を迎えた例を出し、王喬・赤松子
の長寿を保つためには、地位を譲るべきだと迫った。後掲H『史記』

范睢蔡澤列伝にも、ほぼ同文が引かれる。

D 『新語』 思務篇

談_レ之以_二喬松之寿_一而行不易。

【君子に語るに王喬・赤松子の寿を例としてもその行いは変わることはない。】

『新語』は、前漢初の陸賈が高祖のために著したものとされる。⁽⁶⁾その中で、君子は仙道を聞かされても惑われないが、凡人は不死の道を開けば迷ってしまうと説く。

E 『淮南子』 卷十一 齊俗訓

今夫王喬赤誦子、吹嘔呼吸、吐_レ故内_レ新、遺_レ形去_レ智、抱_レ素反_レ真、以游_二玄眇_一、上通_二雲天_一。

【そもそも王喬・赤誦子は、息を吹いたり吸ったりして呼吸し、古い息を吐き新しい気をとり入れ、形を忘れ智慧を去り、素朴さを抱き真実に還り、玄妙の道に遊び、雲天に通った。】

F 『淮南子』 卷二十 秦族訓

王喬赤松、去_二塵埃之間_一、離_二群塵之紛_一、吸_二陰陽之和_一、食_二天地之精_一、呼而出_レ故、吸而入_レ新、蹀_レ虚輕拳、乘_レ雲游_レ霧。

【王喬・赤松子は、俗塵を去って、よこしまな俗事から離れ、陰陽の和気を吸って、天地の精を食し、吹いては古い気を吐き出し、吸っては新しい気を入れ、虚空を踏んで軽々と飛びあがり、雲に乗って霧の中に遊んだ。】

『淮南子』は、前漢淮南王劉安(前一七八?～前一二二)の撰。王

喬・赤松子が呼吸法を実践して玄妙の道に遊んだ、とする。この時期に、両者はともに養生法・呼吸法を体得した不老長生の神仙として理解されていたのである。

G 『史記』 卷五十五 留侯世家

願棄_二人間事_一、欲_レ從_二赤松子_一遊_二耳_一。乃学_二辟_レ穀、道引_レ輕身。

【願わくは人間世界のことを棄て、赤松子に従って仙界に遊びたいと思うのみだ。そこで張良は穀物を避けて食わず、導引を行って身を軽くすることを学んだ。】

『史記』は司馬遷(前一四五?～?)の撰。張良(張子房、留侯)は、浪人中黄石老人と出会い、太公望の兵法書を授かり、漢の高祖の軍師として数々の献策を行った。晩年、病弱であったため、辟穀と導引法を実践した。ここに、赤松子を引き合いに出して仙界への憧憬を語るので、中国・日本ともに大きな影響を与えた。

H 『史記』 卷七十九 范睢蔡澤列伝

必有_二伯夷之廉、長為_二応侯_一、世世称_レ孤、而有_二許由、延陵季子之讓、喬松之寿_一。孰_二与_レ以_レ禍終_一哉。

前引C『戦国策』を出典とする。本朝の文人にも、よく知られており、多くの作品に影響を与えた。

I 『史記』 卷八十七 李斯列伝

世世称_レ孤、必有_二喬松之寿、孔墨之智_一。

【代々王侯の自称である孤と称し、王喬・赤松子のような長寿や孔子・墨子のような智慧を保てるでしょう。】

李斯は秦始皇帝の丞相。始皇帝の崩御にともない、胡亥を帝位につけようと、趙高が李斯に迫る言葉の一節。前項同様、Cを踏まえている。

J 「論衡」卷二 無形篇

称_レ赤松王喬、好_レ道為_レ仙、度_レ世不死、是又虚也。

【赤松子と王喬は、道を好んで仙人となつて、世俗を超越して不死を称したが、こんなことは嘘である。】

後漢の王充（二七〇—一〇一？）は、その合理思想によつて、神仙の道を否定している。

K 「漢書」卷七十五 李尋伝

初成帝時、齊人甘忠可詐_二造天官曆包元太平經十二卷_一、以言漢家逢_二天地之大終_一、当_二更受命於天_一、天帝使_二真人赤精子_一、下教_レ我此道_上。

【はじめ成帝の時、齊人の甘忠可が「天官曆」「包元太平經」十二巻を偽造して、「漢家は天地の大終に逢つている、まさに改めて命を天に受くべきであり、天帝は真人の赤精子を遣わして、下してこの道を我に教えさせたのだ」と言つた。】

『漢書』は後漢の班固（三二—九二）撰。讖緯説に基づく再授命説を、齊人の方士が偽造したのだが、そこで赤松子の名を權威あるものとして出している。この時代に、予言書としての赤松子讖が流行したらしい。

L 「文選」卷一 班猛堅「西都賦」

庶松喬之群類、時遊_二從乎斯庭_一。

【こい願わくは赤松子・王喬などの神仙が、いつもこの庭で遊んでくれることを。】

以下四例は、本朝の文人が最も受容した『文選』所収の詩賦。これは、『漢書』を編纂した班固の作。漢の武帝の建章宮の広大な庭園には、神仙境が造られていた。そこに松喬らが舞い降りることを望んだ句。『文選』卷二「西京賦」（後漢・張衡）にも、建章宮に関連して「美_二往昔之松喬_一」の表現が用いられる。

M 「文選」卷二十一 郭景純「遊仙詩」

赤松臨_二上遊_一 駕_レ鴻乗_二紫煙_一

左把_二浮丘袖_一 右拍_二洪崖肩_一

【赤松子は川の上流に臨み、鴻に乗つて紫煙に浮かんでいる。左には浮丘公の袖をとり、右には洪崖先生の肩をたたいている。】

『山海経』を注した郭璞（二七六—三三四）の作。いにしへの仙人に思いを馳せている。浮邱公は、王子晋と接し嵩高山に上つた道士で、『列仙伝』にみえる。洪崖先生は、黄帝の臣とも、神農の師ともいい、『神仙伝』卷八—2では、太華山で許由・王子晋らとともに衛淑卿と碁を打っていたとされる。V参照。

N 「文選」卷二十二 魏文帝「芙蓉池作」

寿命非_レ松喬 誰能得_二神仙_一

遨遊快_二心意_一 保_レ已終_二百年_一

【寿命は赤松子・王喬ではないのだから長く保てない、誰が神

仙となることができようか。ゆうゆうと遊んで心を爽快にして、
楽しみながら百年の命を終えたいものだ。】

曹操の長子、陳思王曹丕（一八六―二二六）の五言詩。夜、美しい蓮池のほとりを散策して詠じたもの。不老不死の神仙の代表として、松喬を引き合いに出す。

○『文選』卷二十四 曹子建「贈_二白馬王彪_一」

苦辛何慮思 天命信可疑

虚無求_三列仙_二 松子久吾歎

变故在_三斯須_二 百年誰能持

離別永無_二会_一 執_レ手將何時

【辛苦して何を思いはかろうとするのか、天の寿命などまことに疑うべきである。虚無の道を列仙に求めたが、赤松子は久しく私を欺いていたのだ。変わったり事故に遇ったりはすぐのこと、百年の命を誰がよく保つことができようか。ここで別れてしまえば長く会うこともないだろう、互いに手を取り合うのはいつの日のことであろうか。】

曹操の第三子、曹植（一九二―二三二）の五言詩。白馬王彪は弟で、のち楚王に封ぜられたが、自殺したとも、文帝によって毒殺されたともいう。植・彪がともに帰国の際、二王が同宿することを臣下に止められ、憤って彪に贈った詩。別れの悲しみを詠ずる中に、列仙のような長寿を保つことは不可能であると述べる。J『論衡』を意識するか。

P『抱朴子』内篇卷十一 仙薬

赤松子、以_三玄虫血_二漬_レ玉為_レ水而服_レ之。故能乘_レ烟上下也。

【赤松子は、蟬の血を玉に漬けて液状にして服用した。だから霞に乗って空を上下することができた。】

『抱朴子』は、西晋の葛洪（二八四―三六三）の撰。仙薬としての玉の調合法と服用法を記す箇所、赤松子実践したとされる方法が記される。

Q『神仙伝』卷二―2

黄初平者、丹溪人也。年十五、家使_レ牧_レ羊。有_二道士_一、見_レ其良謹、便将_三至_二金華山石室中_一、四十余年、不_レ復念_レ家。……初平、改_レ字為_レ赤松子。

【黄初平は、丹溪の人である。十五の年に、家で羊を放牧させた。ある道士がその真面目さを見込んで、金華山の石室中に連れていき、四十年間家を思い出さなかった。……初平は字を改めて赤松子とした。】

『神仙伝』も『抱朴子』と同じ葛洪の作。黄初平は、牧羊童であったが道士となった。四十年後、兄の黄初起に再会。兄は初平が羊を石に化するのを見て、自らも仙道を学び、初平は赤松子と、初起は魯班と名を改めたという。金華山は、浙江省金華市にある。司馬承禎（六四七―七三五）『天地宮府図』に掲げる、三十六洞天第三十六。宋の倪守約『赤松山志』⁷⁾には、黄初平は東晋咸和三年（三三二）に誕生したと説き、洞窟や山について詳説する。現在も、山中には赤松

観があり、附近には双龍洞・氷壺洞など、奇石や地下の巨瀑を有する数々の洞窟がある。巨石の羊石に連なる形で、赤松下宮の建物が建てられている。⁽⁸⁾

R 沈約「赤松澗詩」

松子排煙去 英靈眇難測
惟有清澗流 潺湲終不息

【赤松子は煙をひらいて去ってしまい、優れた靈魂は遙かかなたに遠ざかり凡人の知るところではない。その跡にはただ清らかな谷川の流れがあるのみで、水がさらさら流れる昔はやむことがない。】

『晋書』『宋書』などを編纂した、沈約(四四一〜五二二)の詩の一節。赤松澗は、金華山にある谷川。QS参照。『芸文類聚』巻七十八「仙道」に引用されており、本朝の文人に広く参照された。『芸文類聚』には、他に十数箇所赤松子の名が見えるが、省略する。

S 『水経注』巻四十 漸江水

或謂之長仙県也。言赤松采葉此山、因而居之、故以為名。
……溪水又東、逕長山県北、北对高山。山水水際、是赤松羽化之處也。炎帝少女追之、亦俱仙矣。後人立廟於山下。

【あるいはこれ(長山県)を長仙県ともいう。赤松子が葉をこの山に採取し、住んでいたので、名づけられたのである。……溪水はまた東に向かつて流れ、長山県の北を経て、北に高い山に對している。山下の水際こそは、赤松子が羽化登仙した所であ

る。炎帝の娘がこれを追って、ともに仙人となった。後人が廟を山下に建てた。】

『水経注』は、北魏の酈道元(？〜五二七)が『水経』を注したもの。

赤松子と神農の娘が登仙した場所に廟を設けたとする。A『列仙伝』の記述を承けた形となっている。長山県は、現在の浙江省金華市。

QR 参照。

T 陳子昂「春日登金華觀」(『全唐詩』巻八十四)
鶴舞千年樹 虹飛百尺橋
還疑赤松子 天路坐相邀

【鶴は千年の樹上に舞い、虹は百尺の橋となって架かる。還つては赤松子かと疑い、天への路に坐してお迎えしよう。】

唐の陳子昂(六六一〜七〇二)の五言詩。陳子昂は、他にも赤松子を題材に詩を詠じている。金華觀は、現在の赤松觀であろう。前記QRS参照。

U 白居易「仲夏齋戒月」(『全唐詩』巻四百三十一、『白氏文集』0371)

禦寇馭冷風 赤松遊紫煙
常疑此說謬 今乃知其然

【列子は冷たい風をあやつり、赤松子は紫煙に乗って空を飛んだ。いつもこの説は嘘だろうと疑っていたが、今それが真実であることを知った。】

唐代の詩人のうち、白居易(七七二〜八四六)は、最も本朝の文人

貴族に愛された。居易は、ある五月、精進潔斎して三十日間肉類を断つた。そのため心身爽快を自覚し、これを続ければ神仙にもなれるだろう、と感慨を詠じている。

〔V白居易「題裴晋公女儿山刻石诗後。」〕〔全唐詩〕卷四百五十三、
〔白氏文集〕3004〕

昔号_二天下将_一 今称_二地上仙_一

勿_レ追_二赤松遊_一 勿_レ拍_二洪崖肩_一

商山有_二遺老_一 可_二以奉_二周旋_一

〔裴度は〕昔天下の將軍と号し、今は隠退して地上の仙人と称している。だがまだ赤松子の遊ぶ跡を追ってはいけなし、洪崖の肩をたたいて昇仙してはいけない。ここには商山四皓のような私がいるので、交遊を共にすることができるだろう。〕

女几は、『列仙伝』巻下―26などに見える。仙人の所持する『素書』五巻を写し見て、交接術を実践し、登仙した女仙。女几山は河南省宜陽県にある。裴晋公は、晋国公に封ぜられた裴度のことで、白居易と交遊があった。二十年前、裴度が淮西を討つため、女几山を過ぎた折、石に詩を刻したが、その一節に「賊壘を平げ天子に報ずるを待ち、仙山を指して武夫に示すなかれ」とあった。裴度は、のち左遷され隠遁したため、居易はその武將としての功績を讃えるとともに、まだこの世を去らないでほしいと説く。この句は、M郭璞「遊仙詩」を踏まえ、かつG『史記』留侯世家に見える商山の四隠君子の故事を引いている。

W白居易「呉秘監每_レ有_二美酒_一独酌独醉。但蒙_二詩報_一不_二飲招_一。輒此戲酬兼呈_二夢得_一。」〔全唐詩〕卷四百五十六、『白氏文集』32

90)

君称_二名士_一誇_二能飲_一 我是愚夫肯見_レ招

頼有_二伯倫_一為_二醉伴_一 何愁不_レ解_レ傲_二松喬_一

【君（呉秘監）は名士と称せられよく飲むことを誇っているが、私は愚夫であつても招待される意志を持っている。さいわいに酒飲みの劉伯倫に匹敵する劉禹錫が飲み友達となってくれるので、松喬を侮ることを解さないといつても何を愁うことがあろうか。】

呉秘監と詩のやりとりはするものの、美酒を独り飲むばかりで、いつこうに酒席に招待されないので、皮肉を込めて戯れに詠みかけ、併せ劉夢得（禹錫）にも呈上した詩の頸・尾聯。類似の表現として、『春日閑居三首』（3511）の「便可_レ傲_二松喬_一 何仮_二盃中_一緑」がある。

四 三角縁神獸鏡の赤松子像

こうした赤松子像を、日本ではどのように受容していたのであろうか。本朝で、赤松子の名が見える最も古い遺物は、三世紀のものといわれる三角縁神獸鏡である。周知の通り、三角縁神獸鏡は、日本にしか出土しない古鏡である。これをめぐっては、中国製作説

(舶載鏡説)・日本製作説(仿製鏡説)とともに、近年は呉の工人が渡来して日本で製作したという説も提出され、論争が続いている。⁽⁹⁾

赤松子の名は、例えば、有名な椿井大塚山古墳⁽¹⁰⁾で出土した三十三面の三角縁神獸鏡のうち五面に見える。約五百面の三角縁神獸鏡を集成した樋口隆康によれば、その銘式は二十一種類に分類され、⁽¹¹⁾そのうち三つの銘式に赤松子が含まれるという。

1 三角縁神獸鏡 銘式8

吾作_二明竟_一甚大好。上有_二東王父西母、仙人王喬赤松子_一。渴飲_二玉泉_一几食_二棗、千秋万歳不_レ知_レ老兮。

【私は明るい鏡を作ったがとてもよくできてきている。鏡の上には東王父・西王母、仙人の王喬・赤松子がいる。彼らはのどが渴けば玉泉の水を飲み飢えれば棗を食べ、永遠に老いを知ることはないのだ。】

2 三角縁神獸鏡 銘式10

張氏作_レ鏡真工。仙人王喬赤松子、獅子辟邪世少有、渴飲_二玉泉_一飢食_二棗。生如_二金石_一天相保兮。

3 三角縁神獸鏡 銘式11

吾作_二明竟_一甚大好。上有_二王喬及赤松、獅子天鹿其義龍_一。天下名好世無_レ双。

三角縁神獸鏡に刻まれた神仙像の中には王喬・赤松子に比定できるものもある。当時の日本人がそれと理解していたかどうかはともかく、古墳時代にはすでに中国の神仙的世界観が伝えられていた。赤

松子は、王子晋とともに代表的神仙として受容されていたのである。

この銘文は、当然中国の神仙観に由来する。A『列仙伝』に見られるように、漢代には赤松子が西王母石室に往返できる、という概念が一般化していたらしく、これを踏まえて刻まれているのである。漢代の古鏡には赤松子の名を刻んだものがいくつつか知られる。例えば、『金文拓本』巻十五に引く、「漢袁氏鏡一」の銘には、「袁氏作_レ竟兮、真大好。上有_二東王父西王母仙人子高赤容子、_一□□□□□□保_二二親_一兮、□孫子□。」とある。⁽¹²⁾これは、上記の三角縁神獸鏡と世界観を共有するものである。同書に引く、「漢劉氏鏡二」の銘には、「王喬赤誦_二葉草_一」ともある。神仙世界において仙薬を搗く図像はよく見られるが、その一部は王喬・赤松子像として描かれていたのである。

五 平安朝における赤松子像

では、平安朝の漢文学作品に、赤松子はどのように描かれていたのだろうか。以下、管見の範囲で網羅的に用例を掲げ、それぞれ出典についても検討する。ただし、「松喬」などと並び称される例は多いので、すべてを掲げたわけではない。

4 『文華秀麗集』巻中 嵯峨天皇「史記講竟、賦得_二張子房_一。」

追従赤松子 避_レ世独超然

【赤松子の跡につき従い、世を避けてひとり超然として暮らし

たい。】

『文華秀麗集』は、弘仁九年（八一八）に撰上された勅撰第二漢詩集。嵯峨天皇（七八六～八四二）御前での『史記』講読が終わり、「張子房」を題として、竟宴において詠まれた五言詩の一節。G『史記』「留侯世家」を踏まえたもの。天皇にも神仙世界への憧憬が強かったことが窺える。

5 『経国集』巻十四 滋野善永「雑言、秋雲篇示同舍郎一首」。
追訪赤松兮遺跡 長年隠几閑余

【赤松子の遺跡を追い訪ね、長年脇息によりかかるような閑かな余生を送りたい。】

『経国集』は、天長四年（八二七）撰上の勅撰第三漢詩集。滋野貞主が序文を書いているが、この詩の作者滋野善永は、その息男か。隠几は、ひじかけによりかかる。『孟子』公孫丑下、「莊子」齊物論・徐無鬼などに見える語。白居易に、これを踏まえた「隠几」（0232）「隠几贈客」（3042）があるが、同時にVをも意識した表現か。

6 『三教指帰』巻中

非独厚_レ彼松喬、薄_レ此項顔。但善保_レ彼性、与不_レ能_レ持耳。

【ひとりかの赤松子・王喬という仙人のみ長寿にしたわけでもないし、項彙・顔回のような才能ある人物を短命にしたわけでもない。ただよく本性を保つか、保てないかで決まるのである。】

空海（七七四～八三五）の若年の作品。巻中は「虚亡隠士論」とし

て道教について論ずる。長命の仙人の代表として赤松子・王子晋を、短命の孔子の師の項彙と弟子の顔回に比している。

7 『田氏家集』巻上19「九日侍_レ宴、冷然院各賦_二山人採_レ葉、十韻_一 応_レ制。」

誰計常思松子遇 未_レ知要繞葛坡投

【誰が常に赤松子に遇いたいと計るだろうか、費長房が葛坡に投じた竹の杖を探す必要もない。】

『田氏家集』は、島田忠臣（八二八～八九二）の家集。九月九日の重阳節に、各句ごとに葉草の名を用いて、山人の葉草採取の題で詠んだ。天皇の詔に応じた応制（製）詩。費長房の故事は、『神仙伝』巻五―6「壺公」に見える。

8 『菅家文章』巻一17「入_レ夏滿_レ旬、過_レ藤中郎亭、聊命_二紙筆_一。笑_二傲松喬_一知_二耳熱_一 愛_二嘲風月_一欲_二心狂_一」

【赤松子・王喬を侮り笑って耳が熱くなるのをおぼえ、風流を愛し嘲って心が狂おしくなってしまう。】

『菅家文章』は、菅原道真（八四五～九〇三）の家集。夏の夜、酒宴を早めに辞去するにあたり、赤松子・王子晋を引き合いに出している。W参照。

9 『菅家文章』巻一40「九日侍_レ宴、賦_二山人献_レ茱萸杖、応_レ製。」挿_レ頭繫_レ臂皆無力 願_二助_二仙行_一趁_二赤松_一」

【茱萸を頭に挿み腕にかけても力が出ない。どうか仙人の行いによって赤松子のような不老長生の境地に赴きたい。】

貞観九年（八六七）九月九日、清和天皇への応製詩とされる。⁽¹³⁾ 7と同様に、重陽の詩会で詠じられた。『芸文類聚』巻四に引く『続齊諧記』を踏まえる。後漢の桓景が費長房に、九月九日に災厄が起こるので茱萸（かわはじかみ）の囊を作り、高所に登り菊酒を飲めと教えられた故事による。白居易も、茱萸は「九日寄微子」（2484）などに、詩語としてしばしば使用している。⁽¹⁴⁾

10 『菅家文章』巻一71「九日侍宴、同賦吹華酒、応製。」

暮景双行多得力 松喬更向小臣慙

【菊酒を飲み夕刻に肩を並べて行けば力が出る。赤松子・王喬もいつそう私に向かつて羞じるであろう。】

【類聚国史】巻七十四により、陽成天皇の元慶二年（八七八）九月九日紫宸殿における重陽節の応製詩とされる。恩賜の菊酒によって、松喬のような不老長生を得られると詠ずる。

11 『菅家文章』巻二97「詩草二首、戯視田家兩兒。一首以叙菅侍疾病死之情。一首以悲源相公失火之家。……」

松喬本是戸行客 衛霍今猶火宅悲

【赤松子・王喬はもともと死体を遺さず昇仙した仙人人であるが、衛青・霍去病のような著名な将軍でも今なお三界火宅の悲しみから出られない。】

【菅家文章】のこの直前に収載する95・96の二首は、名医の菅侍医を慕い偲び、源勤が薨後数箇月で失火によって家を失うという二重の哀しみを詠じ、島田忠臣に贈ったもの。忠臣がそれに酬えてくれた

（『田氏家集』巻中98・99）ので、今度は忠臣の子二人に向けて重ねて答謝した詩。忠臣はそれにもさらに応えている（同巻中100）。

12 『菅家文章』巻五389「徐公醉臥詩」

赤松計会新來客 玄草纏綿旧著衣

【赤松子は新しく来る客のことを思い測っていたが、徐公が目覚めてみると仙草は徐公の着衣にまとわりついていた。】

詩題割註に、佚書『異苑』の徐公と赤松子との遭遇譚を引く。徐公が、長山下に赤松子・安期先生の二仙に出遇って酒を飲まされ、目覚めると二年も経っていたという。安期先生は、『列仙伝』巻上―30に見え、秦始皇帝に引見した時、千歳を超えていたという。同話は『芸文類聚』巻九に、「鄭績之東陽記曰」としても引くが、文章がやや異なる。東陽は、現在の浙江省東陽市であり、金華市に隣接する。長山は、S『水経注』参照。

13 『江吏部集』巻中 大江匡衡

顓頊時出為師、居衡山。号赤精子、説微言経、教以忠順之道。帝行之制礼楽以和天下。

【老子は）顓頊の時出現し師となり、衡山に住んだ。赤精子と号し、微言経を説き、忠順の道を教えた。帝は礼楽の制を定めため、天下は和をもって栄えた。】

大江匡衡（九五二―一〇二二）は、当代一の鴻儒であるが、寛弘三年（一〇〇六）には、『老子』を一条天皇に講じた。その折に詠じた七言律詩の、長大な詩題の一節。老子が各時代に姿を変えて出現し、

皇帝の師となつて道を説いたとする。顯頊の時には赤松子となり『微言経』を説き、忠順の道を教えたといふ。⁽¹⁵⁾

14 『本朝文粹』卷四 大江匡衡「復重上表」

居_レ槐庭_ニ而非_レ用、庶_ニ幾松子於長生_一。

慙_ニ鶴鼎_ニ而是辞、何甘_ニ烏喙於不死_一。

【私は大臣の位に座つていても用をなさないのです、赤松子のよ
うな長生を願いたい。大臣に留まることを羞じて辞している、
トリカブトに不死を願つても甘くなることなどあるだろうか。】
長保二年（一〇〇〇）五月十八日付けの上表文。大江匡衡が藤原道
長のために、三度目の内覧の辞表を草したもの。赤松子に長生への
願いを込めている。

15 『本朝文粹』卷九 紀長谷雄「白箸翁」

然而梅生不_レ死、松子猶生。

【しかし梅生は死なず、赤松子はなおも生きています。】

紀長谷雄（八四五〜九一二）は、菅原道真門下の逸材。佚書『紀家
怪異実録』を著すなど、怪異・神仙への造詣も深い。貞観年中に京
に出現した白箸を売る翁は、尸解仙であったとする。梅生は前漢の
梅福。しばしば帝に諫言を上表した。王莽の政権を嫌い失踪して仙
人になり、市井に出現したという。『漢書』卷六十七梅福伝に、「福
居家、常以_ニ誦書養性_ニ為_レ事。至三元始中、王莽顛_レ政。福一朝棄_ニ妻
子_一、去九江、至今伝以為_レ仙。其後、人有_レ見福於會稽者、變_ニ名
姓_一、為_ニ吳市門卒去_一。」とある。『芸文類聚』卷七十八「仙道」にも、

この箇所を引く。

16 『雲州往來』卷中—85

藥驗不_レ疑、可_レ試_ニ長生久視之術_一也。

須_レ用_ニ扁鵲之方_一、將_レ期_ニ松子之齡_一也。

【薬の効験に疑いはないが、不老長生の術を試みるべきだ。名医
扁鵲の処方を用いるべきで、赤松子の長命を期待したい。】

『雲州往來』は、藤原明衡（九九〇〜一〇六六）の書簡模範文例集。
『雲州消息』『明衡往來』ともいふ。⁽¹⁶⁾ここは医師に対し、鮑の殻を粉
末にした石決明と、麻の実を砕いた麻子散の処方をただず質問状。
長生久視は、『老子』五十九章にある言葉。この返状に、長生久視の
処方秘術なので、後日注進言上するとある。

17 『雲州往來』卷下—15

一思_ニ李老止足之誠_一、一尋_ニ松子養生之術_一。

【一度は老子の分に安んぜよとの誠めを思い、一度は赤松子の
養生法を尋ねる。】

頭中將に権大納言が宛てるといふ設定の手紙。日頃の恩を感謝する
中で、『老子』四十四章の「知_レ足不_レ辱、知_レ止不_レ殆。可_レ以_ニ長久_一。」と
いう有名な処世訓を引き、赤松子のように退隱したいが、年はまだ
懸車の年齢（七十）にならないので、しばらくは忠勤に励みたいと
述べる。

18 『本朝統文粹』卷三 藤原明衡「弁_一関塞」

近土置_レ尉矣、五人歟六輩歟、

列仙好_レ学焉、為_二梅生_一、為_二松子_一。

【国境の関所を守るため尉官を置くのは、五人か六人なのか、列仙は学問を好み、梅福となり赤松子となっていないではないか。】

藤原明衡が問者として、藤原正家（一〇二六―一一一一）に出題した、関塞を弁ぜよという策問の一節。これに正家は、

百里之置_レ尉、偏備_二一人之職_一、

仙家之有_レ郎、定学_二三子之文_一。

【百里の範圍の一国にそれぞれ尉官を置くのは、ひとえに天子の本分に備えるためのものであるし、仙人に郎官があるというのは、きつと梅福・赤松子の文業を学んでいるからなのである。】

と応じた。梅生と赤松子の組み合わせは、15を踏まえるか。仙人が学を好むというのは、前引「漢書」梅生伝に「常に読書・養性をもつて事となす。」に拠り、かつ13のような老子伝説をも踏まえるのである。正家は、のちに大江匡房と並び称される儒宗。

19 『本朝統文粹』卷四 大江匡房「同第三表」

張子房之去_二漢闕_一、跡入_二赤松之風_一、

綺里季之帰_二商山_一、髮垂_二蒼華之雪_一。

【張良は漢の宮殿を去るや、跡を赤松子の風姿を慕って仙道に入り、綺里季は商山に帰るや、髮が蒼華の雪のような白髪と なって垂れてしまった。】

院政期を代表する鴻儒大江匡房（一〇四一―一一一一）が、承保三

年（一〇七六）に藤原師実（一〇四二―一一〇二）のために草した、関白第三の辞表。第二の表は、藤原実綱が作成している。綺里季は、張良が太子如意に人望を集めさせるため招いた、東園公・用里先生・綺里季・夏黄公の商山四皓の一人。蒼華は、毛髮の神。白居易「和_レ祝_二蒼華_一」（2253）などに詠まれる。G「史記」留侯世家を踏まえた上、仙名を赤と蒼の色で取り合わせ、かつVをも参照するか。

20 『本朝統文粹』卷五 藤原明衡「同公辞_二左大臣皇太子傳_一表」

葉園掛_レ冠、照_二殘夢於綠蘿山之月_一、

柴戸高_レ枕、養_二余生於赤松澗之雲_一。

【葉園に冠を掛け、残りの夢を緑蘿山の月に照らされ、柴の戸の粗末な家で枕を高くして眠り、余生を赤松澗の雲に養い長命を期したい。】

康平二年（一〇五九）、藤原頼通（九九二―一〇七四）の、左大臣・皇太子傳の辞表。緑蘿は緑の蔦かずら。M郭璞「遊仙詩」に、「緑蘿結_二高林_一、蒙籠蓋_二一山_一」とあり、白居易「夏日与_二閑禪_一師林下避暑」（3583）に、「緑蘿潭上不見_レ日」と詠まれる。緑蘿山は湖南省桃源県にある。「天地宮府図」に掲げる七十二福地のうち、第四十六。赤松澗とするのは、R沈約「赤松澗詩」を踏まえる。

21 『本朝統文粹』卷八 大江匡房「忙校不_レ如_レ閑」

陶令之遁_レ晋也、撫_二桐孫_一而帰_レ田、

張良之在_レ漢也、随_二松子_一而闕_レ門。

【陶淵明が晋から隱遁するや、桐の孫枝を撫でつつ田園に帰り、張良が漢にあるや、赤松子に隨う者が門にみちあふれる。】

冒頭に「白氏文集云、忙校不_レ如_レ閑」と、「閑忙」(2845)を引用する。閑は養性の基であり、忙は身を費やす道であると論じ、最後に陶淵明と張良の故事を「前史の美談、後代の勝躑なり。」と評価する。陶淵明の「歸去來」(『文選』卷四十五)を踏まえつつ、19と同工の表現を用いて、隱遁の志を述べる。他に、匡房作品中の類似表現としては、『江都督納言願文集』卷三「安樂寺内満願寺願文」の、「張子房之從_二赤松_一矣、豈開_二一乘之蓮_一。」などがある。

22 『本朝文集』卷五十八 藤原敦光「建立中尊寺願文」

金輪聖主玉屐無_レ動、太上天皇宝算無_レ疆、

国母仙院麻姑比_レ齡、林慮桂陽松子伴_レ影。

【願わくは】天皇陛下の玉座は不動のものであり、太上天皇陛下の御寿命も限りなく、皇太后陛下は麻姑に比すような齡を保たれ、皇太子殿下は赤松子が影に伴うような長生を保たれんとを。】

天治三年(一一二六)、藤原敦光(一〇六三―一一四四)が、藤原清衡(一〇五六―一一二八)中尊寺創建の際に作成した願文。麻姑は『神仙伝』卷七―四などに見える、漢代に出現した長命の仙女。

23 『詩序集』卷下 大江通景「冬日於_二左武衛_一藤次将書_二窓_一賦」
佳遊不_レ限_レ年詩。」

清風朗月之天、後会之歎余幾許、

平安朝漢文学における赤松子像

梅生松子之輩、仙齡之芳交相尋者也。

【清らかな風と明るく澄みわたった月の天、のちに会う欲びはいかばかりであろうか、梅福・赤松子の輩のように、仙齡を重ねたすばらしい交りを尋ねるものである。】

『詩序集』は、長久から長承の約九十年間にかけての詩会の序文集¹⁷⁾大江通景は生没年未詳であるが、『後一条師通記』に名が見えるなど、院政期に活躍した人物。ここでも梅福・赤松子を対にする。

24 『鳩嶺集』卷上「春」 藤原茂範「後嵯峨院御願文」

山有_二余寒_一、雪残_二松子之壇_一、

林多_二喜氣_一、風薰_二梅花之廟_一。

【山にはまだ寒気があり、雪は赤松子壇の松の枝にも残っている、しかし春を迎える林には喜びの気分が漂い、風は梅生の廟に咲く梅花の薫りを運んでくる。】

『鳩嶺集』は、永仁三年(一一九五)石清水権別当良清が編纂した摘句集¹⁸⁾。石清水八幡宮護国寺に奉納された願文を中心に名句を集成したもので、平安中期から鎌倉期、特に平安後期の願文類の佚文を多く含む。作者は百三十人余りに及び、伝のはっきりしない者も多い。以下の四首は鎌倉時代のものであるが、平安漢詩文に准ずる用例として紹介する。この隔句対は、文章博士藤原茂範が後嵯峨院(一一二〇―一二二二)のために作った願文の佚文。赤松子と梅福を対にすることで、梅の咲き始めの名残り雪の季節感を漂わせている。

25 『鳩嶺集』卷上「夏」 藤原経範「法印棟清愛染王供養願文」

六月灘幽、省入香山楼之禅庭、

一洞風冷、疑臨赤松澗之靈廟。

【六月の川の浅瀬は幽かに流れ、安否をたずねて香山楼の庭に入ると、洞窟の風は冷たく、赤松子を祀る谷あいの靈廟に臨むかと疑うばかりである。】

文章博士藤原経範が、石清水八幡宮護国寺第三十五代别当棟清の愛染王供養のために作成した願文の一節。経範は、24茂範の父。六月の句は、白居易「香山避暑一絶」(3266)に、「六月灘声如猛雨」香山楼北暢師房」とあるのを下敷きとする。⁽²⁰⁾

26 『鳩嶺集』卷下「仙家」菅原在嗣「上院御経供養御願文」

林径霞深、風薫梅花仙人之洞、

澗川春浅、雪残松子先生之壇。

【林の小径の霞はなお深く、風は梅花仙人の洞に薫り、谷川の春はまだ浅く、雪は赤松子先生の壇に残っている。】

文章博士菅原在嗣(？〜一三〇八)が、後宇多院のために作成した御経供養の願文の隔句対。18・23・24・26に、梅福と赤松子を対にする発想が頻出するが、いずれも15紀長谷雄「白箸翁」を淵源とするものであろう。

27 『鳩嶺集』卷下「仙家」藤原宗嗣

華陽観院与雲峙 松子洞庭为月残

【華陽観の建物は雲に対峙して、赤松子廟の庭には月に照らされた雪が残っている。】

「当社三首詩」とあるうちの二首目。春宮権大進藤原宗嗣(？〜一二二二)が、石清水八幡に奉納した七言詩の一聯。華陽観は、長安永崇里にあった道観。白居易が三十四歳の頃、元稹とともに寓居していたため、「春題華陽観」(0619)など、白詩に多く詠まれる。⁽²¹⁾

六 結 語

以上、赤松子についての中国の代表的用例を列挙し、平安朝漢文学における受容の諸相を逐一検討してきた。まず、『列仙伝』の赤松子像であるが、本朝においては、神農時代の雨師で、水玉を服し、自ら身を焼き、崑崙山に西王母石室を訪ね、神農の娘にも慕われ、帝嚳の時代にも出現した、という形象は受け容れられなかった。これに対し、『淮南子』に見える長生・養生の仙、あるいは『史記』張良伝を度々意識するように、代表的な神仙として憧憬の気持ちが強かったことが確認できた。

中国では、赤松子は王子晋との対で神仙の代表として語られることが多く、本朝でもそれは継承される。しかし、平安中期以降は、梅福との対が好まれた。梅と松を対置するのは、いかにも日本的といえよう。中国における用例を精査したわけではないが、いま唐詩では、馬戴「送顧少府之永康」(『全唐詩』卷五百五十六)に、「官伝梅福政 県願赤松家」という表現を探索し得たのみである。梅福とともに、学問を好むという文脈でも用いられるのも、本朝の

特徴である。

平安朝の文人は、『初学記』『芸文類聚』などの類書や、『文選』『白氏文集』などを駆使して詩語のイメージを広げた。作文において、赤松子は、赤と青々とした松の緑の色、そして松という植物を名に含むことから、対句を作りやすく、多用されたともいえよう。『和漢朗詠集』巻下に「仙家」を立てるごとく、不老長生や俗事を離れた隠遁への憧れは強いものがあつたが、赤松子は長生を望む際の、常套句の一つでもあつた。本朝の文人たちは、実際に昇仙するため、金丹を服用したり、洞窟で修業することは決してない。雲に乗る神仙の姿は、あくまで机上の幻影でしかないのである。

小稿は、紙幅の関係もあり、用例の指摘と典拠の確認にとどまるものである。この基礎作業の成果を踏まえ、王子晋と赤松子の形象、ひいては平安朝文人の神仙観について、さらなる考察を深めたい。

※使用テキスト（一部私意に本文・訓点を改めた）

『列仙伝』『文選』 〓 全釈漢文大系、『楚辞』『戦国策』『淮南子』『論衡』 〓 新釈漢文大系、『新語』 〓 漢魏叢書、『史記』『漢書』 〓 中華書局版、『芸文類聚』 〓 上海古籍出版社版、『初学記』『全唐詩』 〓 中華書局版、『白氏文集』 〓 白氏文集歌詩索引、『抱朴子』 〓 正統道藏、『水経注』 〓 四庫全書、『経国集』『江吏部集』 〓 群書類従、『文華秀麗集』『三教指帰』『菅家文章』 〓 日本古典文学大系、『本朝文粹』 〓 新日本古典文学大系、『本朝文粹』 〓 新訂増補国史大

系、『雲州往来』 〓 雲州往来享禄本本文、『詩序集』 〓 吉川弘文館複製本、『鳩嶺集』 〓 図書寮叢刊。

〔附記〕小稿は、二〇〇二年十二月九日、中国広州市中山大学における、日中比較文学国際シンポジウム「新世紀における日中文学関係の回顧と展望」（和漢比較文学学会・中日比較文学学会等共催）の発表稿に、その後見出した資料等を加えて、再構成したものである。また、平成十三〜十五年度日本学術振興会科学研究費補助金ならびに、同年度早稲田大学特定課題研究助成費における成果の一部でもある。

註

- (1) 拙稿「王子晋・羊大傳への追慕と天神の感応」『江談抄』巻六第九話をめぐって」（『説話文学研究』第二九号 一九九四・六）、「天台山の王子信（晋）考」『列仙伝』から「熊野権現御垂跡縁起」への架橋」（『東洋の思想と宗教』第二二号 一九九五・三）。
- (2) 崑崙山・西王母についての概説書としては、曾布川寛「崑崙山への昇仙 古代中国人が描いた死後の世界」（中央公論社 一九八一・一二）、小南一郎「西王母と七夕伝承」（平凡社 一九九一・六）、伊藤清司「死者の棲む楽園—古代中国の死生観」（角川書店 一九九八・一）などがある。
- (3) 内外の諸説については、福井康順「列仙伝考」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三輯 一九五七・一〇）、「福井康順著作集」第二巻 法藏館 一九八七・六所収、沢田瑞穂「列仙伝」について」（『中国古典文学大系』第八巻 平凡社 一九六九・九）など参照。
- (4) 宋版を底本とする上海古籍出版社版では、「赤松子」を「須子」に作るが、ここは四庫全書版に拠った。

(5) 以下は、用例の集成を意図したものではない。現代語訳・解説にあたっては、使用テキストに明記した出典のほか、関連の研究書・解説書を参照した。赤松子伝説を網羅的に研究したものには、櫻井龍彦「王子喬・赤松子伝説の研究」(一)(二)(三)、「龍谷紀要」第六卷第一号、同一号、第七卷第一号 一九八四・八、同一二、一九八五・八)がある。小稿は、以下の用例をはじめ、その成果に負うところが大きい。なお、註(1) 拙稿執筆時にはこの論文未見のため、不十分な点があったことをお詫び申し上げる。

(6) 『新語』の真偽をめぐる諸説については、福井重雅「陸賈『新語』の研究」(汲古書院 二〇〇二・三)を参照されたい。

(7) 『四庫全書』史部十一地理類六所収。

(8) 中国に、赤松子伝承を伝える遺跡は、王子晋のように多くは遺っていない。現代中国では、浙江省金華市の道観群が、その最も大規模なものである。私は、二〇〇二年四月二十七日〜二十八日に、金華周辺の赤松子関係遺跡の調査を行った。金華北山の金華観は、赤松下宮を中心とした道観である。赤松下宮は、黄大仙(黄初平)を祀り、「黄大仙登真之地」と称している。この奥の鹿田湖近くには、黄大仙祖宮という近年建設された道観がある。また、金華市郊外の大仙湖畔には、赤松道院すなわち赤松黄大仙宮という大規模な道観があり、香港・台湾からも多くの参詣者が訪れている。

(9) これには長い研究史があり、参考文献も多い。小稿は、これについて論ずるのが目的ではないが、最近の研究史の整理としては、藤田友治「三角縁神獣鏡―その謎を解明する―」(ミネルヴァ書房 一九九九・九)などがある。ただし、後述の樋口隆康らとは、学説を異にしている。また最近の、福永伸哉他「シンポジウム 三角縁神獣鏡」(学生社 二〇〇三・五)にも、問題点が整理されている。

(10) 京都大学考古学研究室編「樺井大塚山古墳と三角縁神獣鏡」(一九八九・四)、樋口隆康「昭和28年 樺井大塚山古墳発掘調査報告」(京都府山城町

埋蔵文化財調査報告書第二〇集 京都府山城町 一九九八)。

(11) 「三角縁神獣鏡新鑑」(学生社 二〇〇〇・三)。

(12) 引用は、註(5) 櫻井論文に図版と釈文を掲載するので、これに拠った。赤松子の金石文の画像や銘文の遺例については、この論を参照されたい。

(13) 日本古典文学大系「菅家文集・菅家後集」の川口久雄補注。「三代実録」同日条を典拠とする。

(14) 白居易の重陽詩については、平岡武夫「九月九日重陽―白居易歳時記―」(東方学会創立四十周年記念 東方学論集 東方学会 一九八七・六)

『白居易一生涯と歳時記』 朋友書店 一九九八・六所収) 参照。

(15) この詩題をめぐるのは、増尾伸一郎「日本古代の知識層と『老子』―へ河上公注の受容をめぐる―」(豊田短期大学研究紀要 第一号 一九九一・三)『万葉歌人と中国思想』 吉川弘文館 一九九七・四所収、木戸裕子「大江匡衡と唐代道教書」(『新世紀の日中文学関係―その回顧と展望』 勉誠出版 二〇〇三・八) 参照。

(16) 三保忠夫・三保サト子「雲州往来 享禄本 研究と総索引 本文・研究篇」(和泉書院 一九八二・八)、同「雲州往来 享禄本 本文」(和泉書院 一九九七・七)。

(17) 複製に、「詩序集」(吉川弘文館 一九七五・三)があり、成立論としては佐藤道生「『詩序集』成立考」(『国語と国文学』第六二巻二二号 一九八五・一二)『平安朝後期日本漢文学の研究』 笠間書院 二〇〇三・五所収)がある。

(18) 『図書寮叢刊』「平安鎌倉未刊詩集」 宮内庁書陵部 一九七二・三。

(19) 第十五代検校。壇家の祖。伊藤清郎「石清水八幡宮における紀氏門閥支配の形成について」(『歴史』第四九輯 一九七六・一一)『中世日本の国家と寺社』 古志書院 二〇〇〇・六) 参照。

(20) 『鳩嶺集』に割註で、「見『文集悟真寺』とあるのは誤り。

(21) 0179、0619、0623、0627、0633、0810、0839、1082、2282、3628。